Osaka University Knowledge Archive

Title	多民族都市ジェンネの人類学的研究
Author(s)	伊東, 未来
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60017
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【16】

氏　　名	伊東未来（いとうみく）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　２６０７８　号
学位授与年月日	平成25年３月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	**多民族都市ジェンネの人類学的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　栗本　英世 （副査） 教　授　小泉　潤二　　教　授　中川　　敏　　准教授　森田　敦郎

論文内容の要旨

本論文は、西アフリカのジェンネ（Djenné）という伝統的都市の民族誌である。

ジェンネは、マリ共和国の中部に位置する、人口約１万4,000人、面積約0.88km^{2}の町である。町は12世紀頃に興り、サハラ砂漠の南北を結ぶ交易の重要な中継地として栄えてきた。サハラ交易を通じてイスラームが早くから定着したため、ジェンネは西アフリカでもっとも影響力のあるイスラーム都市のひとつとしても有名である。また、ニジェール河の自然増水がもたらす肥沃な内陸三角州に位置しているため、農業・漁業・牧畜もさかんである。これらの歴史的条件と生態は、ジェンネに、生業を異にする複数の民族をひきつけてきた。現在も、ジェンネには10ちかい民族が共生している。

ジェンネは、アフリカでもっとも古い都市のひとつであり、中世以降に複数の王国や帝国からの侵攻や支配を受けながらも、都市国家的な自律性を保持してきた。筆者はジェンネで２年間生活し、人類学的調査をおこなった。本論文は、この現地調査で収集したデータや参与観察の成果をもとに、「過去の遺物」でも「コンフリクトの最前線」でもない、過去をもち現在を生きる同時代のアフリカの都市を厚く記述することを目指した。

本論文の目的は、都市ジェンネの民族誌的記述を通して、以下の４つの問いを明らかにすることである。（１）ジェンネの多民族性は、いかなる生態的・歴史的条件から生じたのか。（２）ジェンネに居住するそれぞれの民族の経済活動や言語、信仰などはいかなるものか。（３）多民族が限られた土地で数百年にわたって共存するなかで、いかに民族的差異を保持・再生産しているのか、また、いかにして他民族との起こりうるコンフリクトを回避しているのか。（４）いかに町が生業や民族別に分裂することなく、ひとつの都市としての一体性を保持してきたのかのか。

上記の問いを民族誌的記述を通じて明らかにするため、本論文は以下のような構成をとっている。第１章でまず、ジェンネの概要および調査概要を示した。そして、人類学的都市研究および歴史学の先行研究のレビューをおこなった。ここから、本論文が人類学における都市研究、とりわけアフリカの都市の研究においてとりこぼされてきた伝統的都市の研究であることを提示した。

第 2 章は、主に問い（1）を明らかにするための章である。ここでは、西スーダンの生態とそれと密接に連関する歴史を、調査で得た口頭伝承や史料をもとに詳述した。これにより、ジェンネの多民族性と都市性が、西スーダンの歴史的諸条件のなかで築かれてきた様態を論じた。

第 3 章は、問い（2）と（3）に答えるものである。ここではまず、この地における民族概念の再検討をおこなった。それをふまえ、ジェンネの諸民族の生業（農業、漁業、牧畜、商業、手工業等）、他民族との社会的・経済的関係を詳述した。これらを通じて、各民族によって社会的分業がおこなわれていること、生業が異なるからこそ不可欠となる異民族間の交換関係が維持されていることが明らかになった。

つづく第 4 章では、ジェンネの都市性について論じた。この章で、問い（4）を明らかにしている。ジェンネの宗教、市場、街区の三つを、諸民族が分裂せずに 800 年以上にわたって共存してきた技法、都市としての統一性を保持してきた技法と捉え、その詳細を記述した。ジェンネにおいてイスラームは、多様な出自の住民を等しく結びつける役割を果たしている。市場は、都市と後背地、外部世界をつなぐ経済的・社会的接触の場である。また、街区は都市を超民族的に分割しており、民族に依らない生活基盤、親密な政治の場となっているのである。

第 5 章では、第 2、3、4 章で示した都市ジェンネの在り方が、いま現在、どのように維持・更新されているのかを明らかにした。とりわけ、ここ 10 年ほどで急増している女性を中心としたアソシエーションの活動の活発化と、世界文化遺産に登録されたことによる観光化に着目した。この様態を詳述することを通じて、現在も進行形で民族を越えた協働が試みられていること、民族的境界の柔軟な操作がおこなわれていることを論じた。

論文審査の結果の要旨

西アフリカ・マリ共和国のジェンネは、800年以上の歴史を有する、ユネスコの世界遺産に登録された都市である。本学位申請論文は、この歴史的都市を民族誌的なアプローチによってトータルに理解しようとする試みである。基本的に「現在時制」に基づいてものごとを理解する人類学者にとって、都市にかかわらず、長い歴史を有する対象を研究することは容易ではない。申請者は、この課題に巧みに対応している。まず、「ニジェール河内陸三角州」と呼ばれるこの地域の、フランス語、英語、日本語で書かれた先行研究が広範に参照され（第1章）、そのなかでジェンネという都市の歴史・社会・経済・宗教的特性が、説得的に明らかにされる（第2章）。以上の導入部に続き、第3章では、現在のジェンネの住民を構成する諸民族に注目し、民族ごとにことなる生業と、民族間の相互依存的な関係が論じられている。次に、都市としてのジェンネを支える要因として、市場（いちば）、住民組織およびイスラームの三つに注目し、それぞれが詳述されている（第4章）。現在進行形で変化しつつあるジェンネの現代的側面を論じているのが最終章である第5章である。ここではとくに、世界遺産登録の結果生じた観光化の波の影響、そして近年増大している女性のアソシエーションの活動に注目し、民族間の境界の柔軟な操作を通じて、境界を越えたあらたな協同が生成しつつあることが指摘されている。

本論文の価値は、第一に民族誌としてたいへん優れている点にある。著者がインタヴューなどを通じて計画的に収集した資料、および直接観察（見たことと聞いたこと）に基づく資料は、質量ともに豊かなものであり、それらが巧みに織り込まれてテキストが構成されている。また、第一人称を多用する文体が意図的に採用され、読者は、失敗や発見の経験、苦労と喜びの経験を含めて、ジェンネという都市の内部に奥深く入りこんでいく著者のプロセス自体を、自分のことのように追体験できるようになっている。このあたりで示されている、著者の民族誌家（エスノグラファー）としての力量は、賞賛に値する。文章は平易かつ明晰であり、きわめて詳細な民族誌であるにもかかわらず、読者は、民族誌的な細部に付き合わされるという、通常の民族誌を読むさいの苦労をほとんど感じることなく読み進めることが可能であると考えられる。結果として、「多民族都市」であるジェンネの姿をトータルに理解するという本論文の目的は、十分に達成されていると言える。

優れた民族誌である本論文は、同時に、都市人類学、民族間関係の人類学的研究、観光人類学、市場（いちば）の人類学的研究、およびアフリカ地域研究といった、おおくの研究分野の進展にも貢献するものであると位置づけることができる。それぞれの分野で、著者の今後の研究の展開が期待されるところである。

以上の理由から、本学位申請論文は博士（人間科学）の授与にふさわしいと判断するものである。